

思春期の子どもを持つ母親のアイデンティティと親子関係

岩本 寿美枝

Women's Identity and Parent-child relationship in middle age

Sumie IWAMOTO

【要旨】本研究は、岡本（1996）の育児期の女性のアイデンティティ様態の捉え方をモデルとして、思春期の子どもを持つ中年期の母親のアイデンティティ様態を、個としてのアイデンティティの達成と母性意識の確立という2つの次元から捉え、アイデンティティ様態と親子関係について検討することを目的とした。150人の母親に質問紙調査を行い（有効回答69）、個としてのアイデンティティ達成度と母性意識の高さにより、統合型、伝統的母親型、独立的母親型、未熟型の4つのタイプに分類し分析した結果、伝統的母親型や統合型の母親は、「子どもへの献身と密着」の感情が高く、独立的母親型の母親は、「子どもの成長に対する寂しさ」の感情が低いことが分かった。4つのアイデンティティ様態別に17人の母親に個別に面接を行った結果、アイデンティティ様態によって著しい相違がみられた。統合型の母親は、不安や葛藤を抱えながらも思春期の子どもと積極的に係わり、伝統的母親型や未熟型の母親は、子どもとの間に不安や葛藤が多く、特に未熟型の母親は、自分自身への不満もみられた。一方、独立的母親型の母親は、子どもとの間に不安や葛藤はあまりなく、互いに独立性を認めていることが伺われた。

【キーワード】アイデンティティ（identity）、中年期（middle age）、親子関係（parent-child relationship）

問題

岡本（1985）によると、“Erikson（1950）は自我同一性（ego identity）を、自分を自分たらしめている自我の性質であり、他者の中で、自分が独自の存在であることを認めると同時に、自分の生育史から一貫した自分らしさの感覚を維持できている状態であるとし、同一性の形成そのものは生涯にわたって続く無意識的な発達過程である”という。本研究は、この定義、用語を採用し、岡本（1996）に従い、自我同一性と同じ意味のアイデンティティを用いる。

岡本（1985）、岡本（1994）は、中年期は自己内外の変化により今までのアイデンティティを問い直す時期（危機）であり、岡本（1996）は、女性のアイデンティティは個の確立と同時に他者との関係性によって発達していく側面が強く、その特質はライフステージによって異なり、家族関係の視点から女性のアイデンティティの発達・変容を考察することは重要な課題で

あるとしている。また、岡本（1994）は、アイデンティティの達成度にはライフスタイル（家庭と職業を両立させている群、子育て後両立群、専業主婦群、未婚群）や職業・育児への関与の仕方と関連性があることを見出した。

岡本（1996）は出産・育児期の女性のアイデンティティ様態を個としてのアイデンティティ達成と母性意識の確立という2つの次元から捉え、Ⅰ 統合型、Ⅱ 伝統的母親型、Ⅲ 独立的母親型、Ⅳ 未熟型という4つのタイプを見出している。そして両者が統合された最も成熟したタイプと考えられる統合型の女性は、自分の人生と育児が調和しており、育児によって自分自身が成長してきたことや生きがいになっていることが明確に意識されていた。母性意識は花沢（1992）によると“母親であることの自覚のもとづく妊娠・分娩・育児への態度や価値観”と定義されており、母親の年代間比較においても大きな違いは見られないことを明らか

にしている。このことから思春期の子どもを持つ中年期の母親においても、個としてのアイデンティティ達成と母性意識の確立という2つの次元からの同様の捉え方ができることが示唆される。

本研究は、岡本(1996)の育児期の女性のアイデンティティ様態の捉え方をモデルとして、自立心の芽生えや反抗の起こりやすいとされる思春期の子どもを持つ中年期の母親のアイデンティティ様態を、個としてのアイデンティティの達成と母性意識の確立という2つの次元から捉え、アイデンティティ様態と親子関係について検討することを目的とし、以下のように仮説を立てた。① 個としてのアイデンティティ、母性意識ともに高い母親は、思春期の子どもをうまく受け入れ、子どもとの葛藤は少なく、また、自分の人生に対しても積極的であろう。② 個としてのアイデンティティが低く、母性意識が高い母親は、思春期の子どもへのコントロールが難しく、甘やかしが起こりやすく、子どもとの葛藤が多くなるであろう。③ 個としてのアイデンティティが高く、母性意識が低い母親は、自分自身の人生に対して積極的であり、思春期の子どもへの支配・統制が多いであろう。④ 個としてのアイデンティティが低く、母性意識も低い母親は、自分自身の人生に対して積極的でなく思春期の子どもとの関係がうまく行かなくなったときには、放任や虐待が起こりやすいであろう。

研究 I

1. 目的

思春期の子ども(小学5、6年生または中学生)を持つ母親の4つのアイデンティティ様態によって、子どもに対する感情や子どもとの関係のとり方に違いがあるかどうかを検討する。

2. 方法

(1) 調査対象者

調査対象者は、小学5、6年生または中学生を持つ母親である。広島市とその近郊の学習塾に通う生徒(小学5、6年生または中学生)150人に、母親宛の質問紙を塾の先生を通じて持ち帰ってもらい、記入後は郵送を依頼した。70人から回答があり、(回収率46.7%)、有効回答は69であった。69人の母親の平均年齢は41.6歳(年齢範囲:34歳~51歳)であった。

(2) 手続き

本研究は、以下の4種類の尺度とフェイスシートか

らなる質問紙調査を、2008年4月~6月に郵送調査法で行った。

① 個としてのアイデンティティ測定尺度

Rasmussen(1961)の自我同一性スケール(Ego Identity Scale)を宮下・平野(1981)が翻訳、標準化した60項目からなる質問紙(E. I. S)を使用した。

② 母性意識の尺度

花沢(1992)の母性理念質問紙27項目を使用した。

③ 母親感情の尺度

大日向(1988)の母親感情の尺度24項目を使用した。「子どもへの献身と密着」、「子どもの人格の独立性の意識」、「子どもの成長に対する寂しさ」を下位概念とした。

④ 親子関係尺度

新井他(1993)の親子関係尺度の母親版42項目を使用した。下位概念は、「子どもの行動についての母親の知識」(子どもの把握)、「自分の行動についての母親の認知」(母親の自覚)、「母親の支配」(母親のしつけ)であった。新井他(1993)の愛情の尺度は、「子ども中心的愛情」、「自己(親)中心的愛情」、「愛情なし」の3つの愛情の類型に分類するものであった。

3. 結果

(1) アイデンティティ様態

個としてのアイデンティティの達成度をRasmussenの尺度を使用し、アイデンティティ得点を算出した。アイデンティティ得点の高いほどアイデンティティの達成度が高い。また、母性意識は、花沢(1992)の母性理念質問項目を使用し、母性得点を算出した。母性得点が高いほど母性理念がよく形成されている。アイデンティティ得点と母性得点をそれぞれ高群(上位50%)、低群(下位50%)に分類し、アイデンティティ得点が高く母性得点が高い群をⅠ統合型、アイデンティティ得点が低く母性得点が高い群をⅡ伝統的母親型、アイデンティティ得点が高く母性得点が高い群をⅢ独立的母親型、アイデンティティ得点が低く母性得点が低い群をⅣ未熟型の4タイプに分類した。Table 1にアイデンティティ様態の4タイプの平均値と標準偏差を示す。

(2) 母親感情

大日向の母親感情に関する尺度を使用し、下位概念である「子どもへの献身と密着」、「子どもの人格の独立性の意識」、「子どもの成長に対する寂しさ」のそれぞれについて母性感情得点を算出した。得点が高

いほど、それぞれの母親感情が高い。アイデンティティ様態を独立変数、母親感情を従属変数とし、3つの母親感情の下位概念について、それぞれ1要因の分散分析を行った結果、「子どもの人格の独立性の意識」に対してはアイデンティティ様態の効果が認められなかったが、「子どもへの献身と密着」($F(3,68)=6.70, p<.01$)と「子どもの成長に対する寂しさ」($F(3,68)=7.85, p<.01$)にアイデンティティ様態の効果が認められた。多重比較の結果、「子どもへの献身と密着」の得点は、伝統的母親型 ($M=2.93, SD=0.30$) や統合型 ($M=2.86, SD=0.29$) の方が未熟型 ($M=2.51, SD=0.49$) や独立的母親型 ($M=2.47, SD=0.38$) よりも高かった。「子どもの成長に対する寂しさ」においては、未熟型 ($M=2.26, SD=0.44$) や伝統的母親型 ($M=2.20, SD=0.30$) の方が独立的母親型 ($M=1.91, SD=0.38$) よりも高かった。

(3) 親子関係

新井他 (1993) の親子関係の下位概念である、「子どもの把握」、「母親の自覚」、「母親のしつけ」のそれぞれについて親子関係得点を算出した。アイデンティティ様態を独立変数、親子関係を従属変数とし、

「子どもの把握」、「母親の自覚」、「母親のしつけ」について、それぞれ1要因の分散分析を行った結果、アイデンティティ様態の効果は認められなかった。アイデンティティ様態における母親感情と親子関係の平均値と標準偏差をTable 2 に示す。愛情の尺度は、「子ども中心的愛情」「自己(親)中心的愛情」「愛情なし」の3つの愛情の種類の項目から1項目ずつ選択し、8問のうち4問以上で同一の選択肢を選んだものを類型化した。アイデンティティ様態ごとに類型化された人数を算出し、人数の最も多いものを各アイデンティティの愛情の型とした。その結果、どのアイデンティティ様態においても「子ども中心的愛情」が最も多く、4タイプにおいて差は認められなかった。

4. 考察

- ① 伝統的母親型や統合型の母親が未熟型や独立的母親型の母親よりも「子どもへの献身と密着」の度合いからみた母親感情得点が高いのは、母性意識得点が高いことによる。
- ② 独立的母親型の母親が未熟型や伝統的母親型の母

Table 1. アイデンティティ様態の4タイプの平均値と標準偏差 ($n=69$)

タイプ	アイデンティティ得点		母性得点		人数
I 統合型	高	169.16 (6.54)	高	81.47 (4.37)	21
II 伝統的母親型	低	146.00 (10.18)	高	80.88 (4.36)	17
III 独立的母親型	高	167.87 (6.45)	低	69.33 (6.31)	18
IV 未熟型	低	148.53 (9.35)	低	66.33 (5.87)	13

(注1) 平均 (SD)、

(注2)] は、 $p<.05$ で有意な差があったところを示す。

Table 2. タイプ別に見た母親感情と親子関係の平均値と標準偏差

タイプ	母親感情			親子関係		
	献身	独立性	寂しさ	子どもの把握	母親の自覚	母親のしつけ
I 統合型	2.86 (0.29)	2.84 (0.30)	2.20 (0.30)	3.16 (0.43)	2.90 (0.28)	2.49 (0.28)
II 伝統的母親型	2.93 (0.30)	2.73 (0.20)	2.50 (0.23)	3.04 (0.45)	2.87 (0.27)	2.60 (0.20)
III 独立的母親型	2.47 (0.38)	2.67 (0.36)	1.91 (0.38)	3.08 (0.40)	2.98 (0.35)	2.53 (0.20)
IV 未熟型	2.51 (0.49)	2.85 (0.33)	2.26 (0.44)	3.00 (0.34)	2.85 (0.35)	2.47 (0.23)

(注1) 平均値 (標準偏差)

(注2)] は、 $p<.05$ で有意な差があったところを示す。

(注3) 子どもへの献身と密着は「献身」、子どもの人格の独立性の意識は「独立性」、子どもの成長に対する寂しさは「寂しさ」と表す。

親よりも「子どもの成長に対する寂しさ」の度合いが低いのは個としてのアイデンティティが高いことによる。

- ③ 4つのアイデンティティ様態別にみたとき、「子どもの人格の独立性の意識」からみた母親感情得点や、「子どもの把握」、「母親の自覚」、「母親のしつけ」からみた親子関係得点に有意差はなかったが、全てのアイデンティティ様態のタイプにおいて、母親感情得点も親子関係得点も高く、天井効果がみられた。
- ④ 愛情の型においては「子ども中心的愛情」がどのアイデンティティ様態においても最も多く認められ、子どもに対して愛情が高いことが示唆された。
- ⑤ 仮説と照らし合わせると統合型に関しては、「子どもへの献身と密着」が高いとの結果から、仮説に反して子どもとの葛藤は大きく、伝統的母親型に関しては、「子どもへの献身と密着」や「子どもの成長に対する寂しさ」が高いとの結果から、仮説が支持された。独立的母親型に関しては、「子どもへの献身と密着」が低く、「子どもの成長に対する寂しさ」が低いことが認められた結果から、子ども以外で生きがいがあり、仮説通り、子どもへの統制が大きく、未熟型に関しては、「子どもの成長に対する

寂しさ」が高いことが認められた結果から、子どもへの甘やかしが示唆され、ほぼ仮説が支持されたが、子どもとの間に葛藤があるかは明確ではない。

研究II

1. 目的

4つのアイデンティティ様態の母親に個別にインタビューを行い、各アイデンティティ様態を示す母親が子どもとの関わりの中で示す特徴を明らかにする。

2. 方法

(1) 調査対象者

調査対象者は、研究Iと同様の母親の中から選出し、アイデンティティ様態の統合型5人、伝統的母親型4人、独立的母親型5人、未熟型3人の合計17人の母親であった。平均年齢は43歳5ヶ月であった。

(2) 手続き

インタビュー項目は10項目を設定し、1人あたり30分程度の半構造化面接とし、全員に録音とメモの許可をとり、面接後に概要をまとめた。面接の概要をTable 3、Table 5、Table 6、Table 7、Table 8に、インタビュー項目をTable 4に示す。

Table 3. アイデンティティ様態のタイプ別に見た面接の概要 (多い順に記載)

	I. 統合型 (5人)	II. 伝統的母親型 (4人)	III. 独立的母親型 (5人)	IV. 未熟型 (3人)
①子どもと話す時	夕食時・寝る前・朝食時・学校から帰宅時・起床時	学校から帰宅時・夕食時・夕食後・寝る前・起床時・調理中	帰宅時・夕食時・食後・お風呂時・朝食時	夜のみ・朝は忙しい・夕食時
①話す内容	その日にあったこと・学校のこと・クラスのこと・生徒会のこと・芸能人・服・ニュースについて	学校であったこと (2人)・おやつのこと・遊ぶ友だちのこと	学校であったこと・友だちのこと・習い事・ニュース・映画・将来の夢について	友だちや学校のこと・連絡事項やスケジュール・会話は多くない (2人)
①聞きたいこととその聞き方	学校のことや勉強のこと・友だち関係・サインが出ている時には聞く・子どもから聞けないことは、他のお母さんから聞く	学校のことを聞きたい・聞いても子どもは言わない (4人)	学校のこと・ほとんど何でも話せているから特に聞きたいことはない (2人)・聞きたい時には子どもに承諾を得てから聞く (1人)	学校の友だち関係・将来のこと (2人)・子どもがどうしたいのぬ、何を考えているのかわからない (1人)
②子どもとの喧嘩	家での決まり事を上の子が守れていなかった、上の子に対して厳しくなる・「友だちがやっているから」という理由だけでは許せない・3人は喧嘩はあまりない	だいたい毎日言い合いになる (2人)・親が一方的に叱る (1人)・下の子がいつも暴言を吐くが祖母も自分も怒らない (1人)	子どもの言い方や態度に対して注意することが多い (2人)・夫と自分との間に子どもが介入し、父をかばう (2人)	小言はこちらから注意する感じ・基本的に自分が押さえつけている・普通に話しても面倒くさがる。

Table 4. インタビュー項目

Q 1.	子どもさんとお話をされるのはだいたい何時頃とか決まっていますか。どんなことを話しますか、また、どんな話が聞きたいですか。
Q 2.	最近子どもさんと喧嘩しましたか。
Q 3.	子どもさんとの間で不安や葛藤がありますか。
Q 4.	子どもさんに対して言ったり行動したりしていることで、あなた自身疑問に思っていることがありますか。
Q 5.	子どものことになると我を忘れて一生懸命になったり、一体感をよく感じることがありますか。それはどんな時ですか。
Q 6.	子どもの人格の独立性について考えることはありますか。
Q 7.	子どもの成長に対して寂しさを感じることはありますか。それはどんな時ですか。
Q 8.	しつけについて方針がありますか。その際、一番大切なことは何だと思いますか。
Q 9.	あなたの生きがいにしていることは何ですか。
Q 10.	感想がおありでしたらお聞かせ下さい。

Table 5. アイデンティティ様態のタイプ別に見た面接の概要 (多い順に記載)

	I. 統合型 (5人)	II. 伝統的母親型 (4人)	III. 独立的母親型 (5人)	IV. 未熟型 (3人)
③ 不安 や 葛 藤	<ul style="list-style-type: none"> 親としてはその年齢に似合ったレベルで行動してほしい。 小学時と中学時と高校時では、接し方が違う、子どもにとっては辛いかもしれないが、大事なことだ。 新しい環境に適応しにくいので、先を思うと少し心配。 友だち関係で心配な時期があったが、自分がどうしてあげようということとはなかった。 	<ul style="list-style-type: none"> よその子を見ていて、自分の子はあまりにも幼いと不安になる。 友だちがよくないのではないかと不安になる。 幼い時に自分のことについて聞いてやっていた、今話してくれないのは自分のせいでもある。 毎日様子は見るようにしているが、表情がおかしい時には不安になる。 	<ul style="list-style-type: none"> 自立が一番 (2人) 自分自身で養えるだけの手に職をつけてやりたい。 家から出ない子もいるが、不安はあまりなく、それぞれの個性だからそれぞれのままでいい。 先々の心配はあるが、何かをする訳ではないから意味がないので辞めようと思う。 自分にはない性格なので子どもの気持ちは分からない。 上の子をみてきているので、親にゆとりができていてそういう時期だと思えた。 	<ul style="list-style-type: none"> 進路で子どもに要求したい気持ちはあるが、自分自身も向上心が強い訳ではないのであまり言えない。 子どもは私に対して自分を出せていない、顔色を伺っている感じがする。 子どもが遅刻しそうになると休みがちになる、連れて行ったりすることもある。
④ 自 分 の 接 し 方 に つ い て の 疑 問	<ul style="list-style-type: none"> 長女が自分だけ怒られると気づいていた、兄弟で比べない方がいいと思うが、つい言い過ぎになる。 干渉し過ぎかな、言ってほしくないことを突ついたりしてしまう。 朝髪型を気にして遅くなるので、早く出なさいとずっと言うてしまう。 	<ul style="list-style-type: none"> 子どもから「みんながしている」と言われるとどこまで許していいのか分からない、一貫性がない。 友だちのことにに関して、親として言いたいことをはっきりと伝えていないので伝わっていないのではないかと思う。 黙っていられず、我慢はするけど最後には言うてしまう。 自分が感情的になることがあるので、それが子どもに出ているのかなと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> 理不尽な怒り方をした時は後で気がついたら子どもに謝る (2人) 大人の話も子どもに聞いてもらったりするが、社会勉強だと思って聞いてねと言う。 怒ってしまうことに反省するが、我慢していたら爆発するかもしれない。 最初の子には力が入り過ぎて教育ママだったことに今気づいている。 	<ul style="list-style-type: none"> 細かくうるさく言って育ててきて、もっと伸び伸び育てればよかったと反省するが、すぐ忘れてしまっている。嫌なことがあったら抑えられなくて当り散らす。 上を目指して頑張ることに対しては、こちらからやれやれと言うのはどうかと思ひ、言う時もあるし言わないこともある。

Table 6. アイデンティティ様態のタイプ別に見た面接の概要 (多い順に記載)

	I. 統合型 (5人)	II. 伝統的母親型 (4人)	III. 独立的母親型 (5人)	IV. 未熟型 (3人)
⑤ 子どものとの一体感	<ul style="list-style-type: none"> ・一体感はありません(4人) ・あえて言えば受験のときぐらい。 ・最近まであったが、周りの大きい子と連れている人の話を聞いたりして今は悟ってきている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ある、ずっと専業主婦できたので、ずっと子どもと一緒にだった。 ・ある、子どもがピアノで賞をとった時、子どもは母が喜んでくれたことが嬉しいと言った。 ・あまりない。(2人) 	<ul style="list-style-type: none"> ・一体感はない。(4人) ・自分が子ども、子どもは子ども。 ・振り返ってみて上の子の時はあった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一瞬、試験前には応援隊のようになる。 ・子どものためとは常時は思って生きていない。 ・小さい時、自分が好きだったので子どもをボーイスカウトに入れた。キャンプにも自分が行きたかったのでついて行った。
⑥ 子どもの人格の独立性	<ul style="list-style-type: none"> ・独立性を認めることは大事(4人) - (自分の時のことを思い出して子どもにも認める。・上の子にはよく指図したが、プラスになっていないので下の子には言わない。・大好きだけど結婚したらあきらめるから、と子どもに言う。) ・小学校では自由、中学は親の圧力がある時期、高校では自由にさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・独立性を認める(3人) - (気持ちとしては準備している。・大きくなったら思う通りにいかない。・子どもが好きなことをすればいいのかなと思う。) ・どこでも好きな所へ行って好きなことをしておいではなかなか言えない。(1人) 	<ul style="list-style-type: none"> ・独立性を認める(5人) - (子どもは元々頼ってこない、しっかりしていると思う。・小さい時から一人で生きていけるようにとの思いで育てている。・自分の子ではあるが実は違うということに気づいている。・可愛い子には旅をさせよということわざ通りだと思う。) 	<ul style="list-style-type: none"> ・漠然とは思うがあまり考えない。 ・自分の思い通りにしたいと思うが、子どものためだけには生きていけない。 ・自分の言うようにしてほしいが、大きくなったということを聞かない。

Table 7. アイデンティティ様態のタイプ別に見た面接の概要 (多い順に記載)

	I. 統合型 (5人)	II. 伝統的母親型 (4人)	III. 独立的母親型 (5人)	IV. 未熟型 (3人)
⑦ 子どもの成長に対する寂しさ	<ul style="list-style-type: none"> ・今は寂しさは感じない(4人) - (子どもの成長が楽しみであり、自分の時間をどうするかを考える楽しみもある。・以前、一体感があった頃は寂しさを感じたことがあったが、今は成長を喜べる。・一番上の子が中学に入った時寂しいときはあったが、今は毎日が面白い。・今は寂しくないが、もう少しすると寂しくなるかもしれない) ・寂しさを感じる(1人) - 自分で何でもしようとするところに寂しさを感じる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・今はそうでもないが将来を思うと寂しくなるだろうと思う(4人) - (中学になると寂しいだろうと思う。) ・今のことが一生懸命なのであまり思わないが、もうすぐ離れていくんだろうなと思う。 ・家から出て行ったら寂しいだろうなと思う。 ・今は家にいるが、将来はどうなるのか不安である) 	<ul style="list-style-type: none"> ・寂しさは感じない(4人) - (小さい時からベタベタしていないので、思春期になってもあまり変わらない。・将来子どもが自分の行きたい選択をとれると嬉しい。・大きくなることは嬉しい。・成長していくことが有難い。) ・独立している子が戻ってきてまた帰っていくとき、寂しさを感じるが、また平常心に戻っていく(1人) 	<ul style="list-style-type: none"> ・寂しい(3人) - (先を思うと寂しい、親が自立しないといけなと思う。・上の子はクラブや塾で遅くなり、家にいることが少なくなってすごく寂しい、このまま自分は年を取っていくのかと思う。・すごい寂しいというほどではないが、どうしたらいいんだろうという気持ち)
⑧ しつけについて	<ul style="list-style-type: none"> ・嘘をつかない、相手の立場になる。 ・人に迷惑をかけない、挨拶、約束を守る、言い訳をしない、謝ることを基本的に辛せになってほしい。 ・食事のマナー、門限、小遣い帳をつける。 ・特にないが小さい時から身についている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・その日の状況によって変わる、不安であるが何年も同じである。 ・挨拶くらいはと思うが、できているかどうかは分からない。 ・人に迷惑をかけないというのは家で共通、その他は親と同居なので意見が違った。 ・人に迷惑をかけない、挨拶は言っているが、夫と意見が合わない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本人の意志にまかせる、間違っている時は提案する。 ・挨拶、みんな平等の精神、楽しむこと。 ・人に迷惑をかけない、挨拶、相談すること。 ・挨拶と恩を受けたことは返す。 ・挨拶、食事のマナー、一般的な常識、上の子たちをしっかりとしつけておけば、下の子はそれに従う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・はっきりはないが他人に迷惑をかけないこと。 ・挨拶と食事のマナー、言葉使い。 ・その都度で対応、やっつけはいけないことや危ないことは駄目。

Table 8. アイデンティティ様態のタイプ別に見た面接の概要 (多い順に記載)

	I. 統合型 (5人)	II. 伝統的母親型 (4人)	III. 独立的母親型 (5人)	IV. 未熟型 (3人)
⑨ 生きがいについて	<ul style="list-style-type: none"> ・やっぱり子どものサポートが一番、気晴らしはする。 ・夫婦仲良くすることが子どもにも自分にもいい。 ・子どもに手が離れると好きなことをみつける。 ・子どもを優先するが、趣味も楽しみ。 ・子どもが一番であるが、自由時間は好きなことを楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・小学校の間は子どもについておく、その後は仕事か何かを考えている。 ・今は子どものサポート、楽しみは映画や買い物。 ・子どものことだけでなく、何かやりたい気持ちはある。 ・特別にないが家族みんなが元気でいれることが望み。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ここ10年は子育て、自分を好きになれる子どもであってほしい。 ・子育て、子どもの独立が楽しみ。 ・特にないが家族みんなが元気でいればよい。 ・以前必死になりすぎて病気になることがあるので、健康でダラダラ過ごすことにしている。 ・今仕事生きがい、一生懸命やっている自分の姿を通して子どもたちも感じてくれるだろう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・特にないが子どもの成長は楽しみ。 ・子どもは大事ではあるが生きがいではない、趣味もあるが、子どもが離れていく空しさを紛らしているのかもしれない。 ・子どもを生きがいということはない、趣味をするのは楽しみ。
⑩ 感想	<ul style="list-style-type: none"> ・人間性が一番だと思うが、下の子と比べて上の子はおっとりしているのが勉強の面でも不安がある。 ・何でも完全にやることは実はそういいことではないと今は考えられるようになった。 ・子どもの人格を認められるようになってからは楽になった。 ・あまり悩まない性格なので子どもにも円満になっているのかもしれない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・上の子と下の子では母親の世代差があり、下の子の友だちの母親とは話がしにくい。 ・3人3様で、上の子はあまり反抗しなかったが、2番目の子は反抗がひどいので不安である。 ・上の子は対人関係が心配、表情が硬いしあまり笑わない、家が面白くないからかもしれない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・上の子も甘えたいときがある、向こうから来た時は受け止めたい。 ・これがいいかどうかは分からないが、周りにはあまり影響されたい。 ・以前は厳しかったが今は楽。 ・自分の好きな仕事をさせてもらいながら幸せ、子どもから学び謙虚でありたい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・転勤族なので子どもの心というよりも学校が変わることが子どもにとって大きいことであると思っていた。 ・母親になるべき人ではなかったかもしれない、このまま年をとっていきは空しいが何を楽しみに生きていけばいいのか分からない。 ・子どもが一体何を考えているのか分からない、何も言うことを聞かない。

3. 結果および考察

統合型の特徴は、思春期の子どもと積極的に関わっており、不安や葛藤がありながらも、子どもと話し合ったり他の母親に聞いたりして解決しようとしていることが伺われた。子育てを通じて自分の人生を積極的に、主体的に生きようとする姿勢がみられた。

伝統的母親型の特徴は、不安や葛藤が多く自分のやり方においても一貫性が持たず、状況に応じて子どもに対する接し方が変わることが伺われる。

独立的母親型は、統合型や伝統的母親型とは違って、「不安はあまりない」との回答がみられ、子どもと自分との関係において、互いに独立性を認めることが基本にあり、自分の信念の通りに子育てをしてきている。

未熟型は、思春期の子どもとの関わりにおいて、不安が非常に高い状態であることが伺われた。話をする機会は少ないが、小言が先に出てしまい、子どもも不満をつのらせて親との会話を嫌がるようになっていく。生きがいについては、3人中3人が「子どもは生

きがいではない」としており、「何を楽しみに生きていけばいいのか分からない」など、自分自身への不安や不満も推察された。

全体の考察

本研究は、個としてのアイデンティティと母性意識の2次元から、思春期の子どもを持つ中年期の母親のアイデンティティ様態と親子関係について検討することを目的とした。研究Iでは、個としてのアイデンティティ達成度と母性意識の高さにより、思春期の子どもを持つ母親のアイデンティティ様態を統合型、伝統的母親型、独立的母親型、未熟型の4つのタイプに分類した。統合型と伝統的母親型の母親は、独立的母親型や未熟型の母親よりも「子どもへの献身や密着」の母親感情が高いこと、また、独立的母親型の母親は、伝統的母親型や未熟型の母親よりも「子どもの成長に対する寂しさ」の母親感情が低いことが明らかになった。

研究IIでは、4つのアイデンティティ様態を示す母

親に個別に面接を行った。面接の回答は、アイデンティティ様態によって著しい相違が見られ、4つのアイデンティティ様態の分類を明確に裏付けるものであり、思春期の子どもを持つ母親が一樣に子どもとの間で葛藤を抱え苦しんでいるわけではないことが明らかになった。個としてのアイデンティティと母性意識の統合のあり方は、思春期の子どもを持つ母親において、母子関係のあり方を左右するものであると思われる。岡本(1995)は、子育ては世話を通しての関係性であり、世話を通じての関係性は、世話される者ばかりでなく、世話する側にも発達・成熟をもたらすものと考えられるとしている。このことから、統合型、伝統的母親型、未熟型の母親は、思春期の子どもとの間で揺れ動く葛藤を抱えるが、子どもとの関係性の中で悩みながら、アイデンティティは発達・成熟していくと考えられる。独立的母親型の母親は、子どもとの間の葛藤を発達の危機と捉えたと、危機のない状態にあるといえる。統合型、伝統的母親型の母親においては、子どもが成長した後の自分の生き方を模索し始めており、現在の葛藤からの将来的展望と考えられるが、独立的母親型の母親においては、将来的展望においては積極的なものはみられなかった。未熟型の母親は、大きな葛藤の只中にあり、自分自身においても子どもとの関係においても何らかの転換を模索することが必要であり、それが難しい場合は深刻な危機ともなり得ることも考えられる。また、この時期の母親を中年期の女性としての視点で捉えてみても、年齢的にも社会的にもアイデンティティを問い直す大きな転換期にあたる

ことが考えられ、子どもとの関係のとり方に加えて、自分自身についても、問い直しを迫られることになるといえる。今後は、子どもの成長とともに母親のアイデンティティが発達・変容していく過程をより明らかにするために、夫婦関係などの他の関係性も含めた親子関係についての縦断的な研究の必要があると思われる。

引用文献

- 新井邦二郎・高野清純・庄司一子・丹羽洋子・藤生英行・浜口佳和・尹熙奉・小林 真・広田信一・谷島弘仁(1993). 新しい視点からの親子関係尺度の作成と検討 筑波大学心理学研究、15、133-146.
- 花沢正一(1992). 母性心理学 医学書院
- 宮下一博・平野 潔(1981). Rasmussenの自我同一性尺度の検討(I)(II) 中四国心理学会論文集、14、48-49.
- 大日向雅美(1988). 母性の研究 川島書店
- 岡本祐子(1985). 中年期の自我同一性に関する研究 教育心理学研究、33、295-306.
- 岡本祐子(1994). 成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究 風間書房
- 岡本祐子(1995). 成人期のアイデンティティ発達における「関係性」の側面について理論的展望と生活レベルに見られる2、3の問題 広島大学教育学部紀要第二部、44.
- 岡本祐子(1996). 育児期における女性のアイデンティティ様態と家族関係に関する研究、日本家政学会誌、47、849-860.